

## ◇編集後記◇

今年の4月から、産業衛生学雑誌編集委員会副委員長の1人に加えていただきました。2週間に1回のペースで開催されるネット編集小委員会に追われるように毎日を過ごしています。というのは少々大袈裟ですが、確かに大変な仕事だと思います。しかし、編集委員の仕事に携わることで、学会誌や学会そのものへの私の関心も深まりましたし、編集委員の先生方とも親しくなって、ネットミーティングもなかなか楽しく感じられるようになってきました。しばらくの間の経験ですが、私なりに精いっぱい関わっていきたくて思っております。

和文誌、英文誌とも学会のオフィシャルジャーナルです。もちろん学会員の研究交流の場として重要なのですが、英文誌はメドラインによって世界中に発信される情報源であり、インパクトファクターもついて、一流雑誌に論文が多く引用されるようにそれなりのステータスも保たなければなりません。改めて責任の重さを感じております。

本号の英文誌JOHを見ますと、一昔前とずいぶん様変わりした感じがいたします。今回も一酸化炭素中毒などの報告があり、もちろん様々な中毒の問題は現在も重要ですが、ストレス・マネジメント、メンタルヘルス関連の報告や、海外からは、医療現場における様々な暴力被害、職場のセクシャルハラスメントなどの問題が報

告されています。産業保健の現場における今日的な課題が垣間見えてきます。

5月20～22日に福岡で開催された第82回日本産業衛生学会に参加してきました。新型インフルエンザで日本中が大騒ぎになっているさなかの開催でしたので、行ってみるまで、本当に開催されるのか不安でしたが、心配無用で、どの会場も熱気にあふれていました。さすがに学会場ではマスク姿の人も多く見受けられましたが、博多の街に出てみますと、だれもマスクを着けている人はなく、学会場だけが特別な場所のように感じられて不思議でした。

学会の最終夕方から「編集委員長と話そう」という企画が開催されました。学会の最終日の夕方にいったいどれだけの人が集まるのか、初めての私としては少々心配していたのですが、会場はいっぱいとなり、意見交換も活発で、改めて本誌への会員の関心の高さと、期待の大きさを感じました。

雑誌は、社会のニーズに伴って内容が変化していきませんが、雑誌のもつ役割も同様だと思います。特にJOHは、その質がますます問われているように感じています。読者の興味を満たす“おもしろい”雑誌を皆さんと目指していけたらと思います。

(福島哲仁)

## 「産業衛生学雑誌」編集委員会

委員長：川上憲人（東京大）

副委員長：荒木田美香子（国際医療福祉大）、井上和男（帝京大）、上島通浩（名古屋市大）、  
車谷典男（奈良医大）、堤 明純（産業医大）、福島哲仁（福島医大）、森本泰夫（産業医大）

有澤孝吉（徳島大）、石竹達也（久留米大）、市場正良（佐賀大）、小笹晃太郎（放射線影響研究所）、掛本知里（東京女子医大）、川口陽子（東京医歯大）、熊谷信二（大阪府公衛研）、黒沢洋一（鳥取大）、河野公一（大阪医大）、酒井一博（労働科学研）、榊原久孝（名古屋大）、澤田晋一（独法労働安全衛生総研）、塩飽邦憲（島根大）、菅沼成文（高知大）、笠島 茂（国立保健医療科学院）、埴田和史（滋賀医大）、竹内 亨（鹿児島大）、田中昭代（九州大）、谷川 武（愛媛大）、土井由利子（国立保健医療科学院）、中尾睦宏（帝京大）、橋本英樹（東京大）、馬場園明（九州大）、濱田篤郎（海外勤務健康管理センター）、丸山総一郎（神戸親和女子大）、三木明子（筑波大）、村田勝敬（秋田大）、森 満（札幌医大）、森河裕子（金沢医大）、八幡勝也（産業医大）、吉田貴彦（旭川医大）、若林一郎（兵庫医大）、渡辺博且（産業医大）

〒160-0022 東京都新宿区新宿1丁目29番地8 公衆衛生ビル4階

電話 03-3356-1536 ファックス 03-5362-3746 振替 東京 00100-7-133495 番